

## はじめに

二〇一三年はパウ・カザルス<sup>①</sup>が没して四〇年になる。世界的に著名なチェリスト、カザルスはスペイン人であつてスペイン人ではない。というのも、彼はスペイン帝国の中心であつたカステイリヤとは異なる、独立自治機運の高いカタルーニヤの出身であり、世界で活躍したコスモポリタンだつたためである。一七世紀に没落したスペイン帝国がウォーラーステインのいう「半辺境」であるならば、カタルーニヤはスペイン王位継承戦争後のスペイン中央集権化の中で、その帝国の中心、カステイリヤに反抗して地方諸特権と政治的諸機関を失つた場所であつた。

しかし従来<sup>②</sup>の伝記では、彼のカタルーニヤ性 (catalanitat)、すなわちカタルーニヤ人としての矜持についてはあまり強調されてこなかつた。本書では、カザルスのカタルーニヤ性という点を軸に、文化国際主義者 (四頁参照) として個人が音楽を通じていかに政治に影響を与えうるかを論じ、音楽と政治の相関関係を明らかにしようとする。

チェロの巨匠、カザルスの伝記は多数存在する。カザルスの弟子・秘書のコレドールの対話を軸とした一九五六年初版の著書や、一九七〇年のカーンによる伝記は、カザルス本人へのインタビューや書簡のやり取りがベースとなつている。カーン自身はのちに伝記を書くカークに対し、この著

書をカザルスの自伝形式にはしたくなかったと述べている。たしかに原典はカザルスの言葉かもしれないが、自分が長年にわたるインタビューから選択し描き出した「私によるカザルスのポートレイト」であるためだ。<sup>(2)</sup>なお、英国に生まれ、米国のユダヤ人左翼ジャーナリスト、ベストセラー作家として活躍したカーンは、アメリカ共産党のメンバーであり、ヴェノナ文書によれば「ファイター」というカバーネームでKGBの情報源となった可能性が強い人物である。<sup>(3)</sup>

これに対しカークによる伝記は、さらに踏み込んだ記述があるものの、カザルスの死からわずか一年後の一九七四年の出版であり、作者が米国人であることもあつてか、カザルスと米国との微妙な関係には深く触れていない。さらに出版前カザルス夫人は、同書の内容に関して懸念を抱いてカーンに相談し、彼はカークを批判していた。一方カークは、カザルス夫妻の弁護士フォータスに原稿のチェックまで依頼している。カークとしてはカザルスらにお墨付きをもらった公式の伝記にしたいなどとは思つたこともなく、出版社もそうした考えではないと述べている。<sup>(5)</sup>いずれにせよ、出版に際してカザルス夫妻の意見が大いに反映され、細かいチェックが入つたということである。

つまりこれらの著者はカザルスに近すぎる同時代人であり、客観的な記述がされているかは疑問である。また内容自体も、カザルスの政治性についてはフランス亡命時代までの記述が中心であるが、カタルーニャとカザルスとの関係に関する記述はわずかである。カーンとカークは米国人であるためにヴェトナム戦争などをめぐる米国とカザルスに関する微妙な関係には触れなかった、触れられなかったのかもしれない。

日本語では、一九六一年のカザルス来日時<sup>(6)</sup>にチェロの指導を受けた井上頼豊の新書<sup>(6)</sup>がカザルスの

足跡を簡単につかみやすい。またカザルスが第二共和国誕生時、人民オリンピックで演奏予定だったベートーヴェンの「交響曲第九番」および「鳥の歌」に焦点を当てたジャーナリスト、石井清司による書がある<sup>(7)</sup>。ただこれもスペイン内戦の背景まで詳しく触れているが、カザルスと亡命スペイン人たちの関係、彼のカタルーニャ性やプエルトリコ亡命時代の記述はわずかである。

一方で英国人ジャーナリストのバルドックは、カザルス夫人や関係者と連絡を取りつつも、カザルスとは距離を置いた客観的な記述を試みている。彼はカークの本をベンチマークに、個人的にカザルスを知らない世代からの視点で描こうとしている<sup>(8)</sup>。バルドックは同時代人でないために、カザルスの女性関係やプロード・フェステイバルの資金問題など、理想化されたカザルス像以外の部分も客観的に記述した。そして「音楽が正義にとつて有効な力たりうる」ことをカザルスは示したと結論づけている<sup>(9)</sup>。けれども、やはり亡命スペイン人たちとの関係、プエルトリコ時代以降のカザルスに関する表記はわずかである。なお二〇一三年には、カザルスは自分の芸術を後世に残そうと執心したと、神格化されたカザルスを批判的に分析した博士論文<sup>(10)</sup>も米国で書かれた。カザルス研究は現在も進展し続けている。

本書は、バルドックの書の客観路線をさらに極め、その問題提起を受けて公文書、書簡などによって裏づけしながら国際関係の中のカザルス、国内政治の中のカザルス、そして個人アクターとしてのカザルスという三層の断面から、カザルス像をさらに掘り下げて明らかにしていく。

本書の特色は、各地に点在する英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・カタルーニャ語の文書・書簡も含む米国、スペイン、カナダ、英国など各国の史料をもとにしたマルチャーカイバルな

アプローチを行い、カタルーニャ語の文献を積極的に使用したことであろう。さらに、カタルーニャ語による研究成果の使用、カタルーニャの研究者との意見交換から、カザルスの中のカタルーニャ性の重要性を浮かび上がらせたい。カタルーニャとカザルスとの関係を深く追究し、プエルトリコに渡ってからのカザルスを米国側からも洞察しながら、今までの評伝では不明瞭だったことを明示したつもりである。特にカタルーニャ人を中心とする亡命スペイン人たちとの関係や、それがケネディ大統領のもとでの演奏会といかに関わっていたのか、またヴェトナム戦争にカザルスがいかに「利用」されたのかについて踏み込んで考えたい。こうしてカザルスの、故郷の大地に根ざした音と音楽、言語と音楽の関係も浮き彫りにすることを試みるものである。

第一に、文化国際主義者としてのカザルスを分析する。入江昭は、「文化的交流を通じて、国や民族とは異なる共同体を形成しよう」とする個人や集団の努力が、「世界という共同体を大きく変質させ、国際問題に対する我々の理解を計りしれないほど豊かにしてくれた」として、彼らの努力の源泉となった知的世界やその功績を総称して「文化国際主義」と名づけた<sup>(1)</sup>。本書ではこの「文化国際主義」者の一例として、コスモポリタンでありかつカタルーニャのアイデンティティの主張を忘れないカザルスに焦点を当て、知識人ネットワークの中での国際政治におけるカザルスの役割を考える。

レイモンド・ウィリアムズは、マイナスイメージとも結びついてきたこともある「知識人」という言葉を、「ある種の専門に限定されない知的な仕事に携わる人々」を中立的に言及する際に用い

るものと定義する。<sup>(12)</sup> 一方でサイードは、知識人の公的役割を、「アウトサイダーであり、『アマチュア』であり、現状の攪乱者」であるとし、知識人個人は、「人間の悲惨と抑圧に関する真実を語る」ことが政党や民族や国家への忠誠心よりも優先すべきとした。<sup>(13)</sup> カザルスは、まさにサイードのいう知識人の定義に当てはまるのではないか。カタルーニャを後にした後ろめたさを持つ亡命者というアウトサイダーであり、政治に関してはアマチュアであり、現状に異議を訴え続けたのだから。

第二に、カザルスの地域ナシヨナリズム、アイデンティティを明らかにする。カザルスは自分の中に根を下ろすカタルーニャ性を明らかにしながらも排他的にならずにアイデンティティの主張を行うが、そういったカザルスおよびスペイン、カタルーニャのおかれた立場を考慮しつつ、議論を進めたい。スペインでは、国としてのナシヨナリズムは、フランス、ドイツ、イタリアと比すと出現が遅かった。それは、山脈で分断された国内の地理要因や、海外領土の回復要求がなかったこと、「半辺境」であり没落帝国であったことなどとも関係するであろう。二一世紀に入ると、スペインでは王立歴史アカデミーが、地方自治体の歴史・地理の教科書が不適切であり、自治州が歴史教育を操作しているとする報告を出した。これにより、各方面でスペイン一般の歴史と自治州の歴史に關して議論が沸騰した。<sup>(14)</sup> そして二〇一二年一月に行われたカタルーニャ州議選では、独立支持派が過半数を占め、独立に関する住民投票へ向けて動いている。現代でも未だに論争の的となるスペイン人としてのアイデンティティとカタルーニャ人としてのアイデンティティの両立を、カザルスはどのようにとらえていたのであろうか。

カザルスの音楽とその活動の軸になるものは、カタルーニャにあるのではないか。カタルーニャ

語の文献をひも解くことで、亡命スペイン政府関係者とのコンタクトのほか、ディアスポラで拡散していたカタルーニャ・コミュニティのネットワークの一面も明らかにしてみたい。すなわち、本書では従来の伝記が当時深く掘り下げられなかった冷戦期を中心に、有機的に結び付けられることとなかったカタルーニャと国際政治の関係をも考慮しながら、カザルスを取り巻く政治を描きつつ、彼の中の愛国心・祖国とは何かを考えたい。

第三に、音楽と政治の相関関係を明らかにする。二〇世紀の国際政治を見渡すと、安全保障、経済、文化という三つの領域の中で、文化（価値観）領域の研究は他の二つに比するとまだ手薄ではないだろうか。特に二一世紀における経済危機、「アラブの春」のような政治体制の変革、東日本大震災にともなう原発事故などによって、我々のこれまでの価値観やパラダイムは揺るがされた。我々はそれらを根本から再考せざるをえなくなっており、そのためには安全保障・経済といった従来の観点からの対応では不十分になってきている。<sup>15</sup> 本書は、その際に新たな解決の糸口を与えうる文化の側面から、国際関係を見直そうとするものである。

伝統的に外交史専門家は、合理的な意思決定プロセスと論理的な思考を分析し、感情は「非合理的」であるとしてその果たす役割にはほとんど無関心であった。<sup>16</sup> しかし、学術雑誌 *Diplomatic History* は二〇一二年一月号に「音楽外交」特集を組み、また、二〇一三年三月にはハーバード大学およびタフツ大学で「音楽と外交」についての講演会が開催されるなど、最近、音楽と広報外交、ソフト・パワーへの関心は高まりつつある。本書は、カザルスの演奏活動・政治思想が世界に与えたインパクトを、感情や五感の果たす役割を考慮しつつ説明しようと試みるものである。

国際政治学者ナイのいうように「ソフト・パワー」が「国の文化、政治的な理想、政策の魅力」によって生まれるのであれば、文化の価値観の不変性とは何であり、どのようにすればソフト・パワーたりうるのだろうか。すなわち本書ではソフト・パワーとなりうる音楽の国際政治における意味を重視し、その好例としてカザルスを扱う。米西戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦の時代を含む激動の一世紀を生きたカザルスの国際政治の中での動向を分析して、現在まで流布している「平和主義者」カザルスのイメージの新たな側面を明らかにする。

そして、なぜ芸術の中でも、たとえばピカソの芸術ではなく、音楽なのか。極限下で音楽が重用される理由として、人間の極限状況と文学との関係を研究する安原伸一郎は次の三つを挙げる。音楽の身体性、共同性、娯楽性である。こうした特性から、音楽は人々をコントロールするために権力側に用いられてきた<sup>(18)</sup>。収容所のような極限状態とまではいかなくても、カザルスはブラード亡命時代、ナチスの取り調べを受け、占領下怯えて過ごした。カタルーニヤ性が演奏者・作曲家・指揮者カザルスの「身体」にしみわたり、カタルーニヤ出身の人々、亡命スペイン人、平和主義者たちとの「共同性」をつくりあげ、特に祖国を追われた人々の「娯楽」(なぐさめ)となっていた。

筆者はこの三点に加え、二〇世紀前半までは、ラジオというメディアに乗って容易に国境を越えられるのは、美術や演劇、文学ではなく、音楽であったという、技術要因を挙げたい。レコードの存在しなかった時代、生の演奏を聴いたことのある人々はわずかであり、そうした生き証人が死んでしまえば「名演奏」も伝説になって語り継がれ、イメージが先行していたことも事実である。幸いにもカザルスはその後のテレビの時代まで生き残るのである。ただしそのラジオ、テレビは、演

奏家と聴衆の間にフィルターを掛けることになる。カザルスの音楽には、こうして様々な解釈がなされるようになる。

第I章では、スペイン帝国の中心カステイリーリヤからみれば、カタルーニャというスペインの周縁から世界に羽ばたくカザルスを描く。逆に第II章では、スペイン内戦勃発によるフランス亡命によりローカル（カタルーニャ的）なもの、アイデンティティを強く意識するようになったカザルスを描く。スペインの中ではマイノリティであったカタルーニャ人。彼らは必然的にアイデンティティを世界に向けてアピールするようになる。またカタルーニャ人とのつながりのみならず、のちのケネディ大統領時代のホワイトハウスでの演奏会への布石となる、亡命スペイン共和国政府関係者とのつながりも明らかにしたい。第III章では、当時、米国の自由連合州という地位にあったプエルトリコというアイデンティティを考えさせられる場所での活動と、米国のプロバガンダとの関係を描く。マイノリティのアイデンティティの存亡をかけた主張を行うという意味では、当時は建国したばかりで「弱者」ともいえる立場にあったイスラエルに、カザルスが共感したのもうなずける。第IV章では、平和の使者として世界的に有名になりつつも、亡命の後ろめたさを背負い続けたカザルスの葛藤と、死後もなお人々の心の中に生き続けるカザルスを描く。特にヴェトナム戦争に関する米国のマイナスのイメージを打ち消すために、米国がいかにカザルスを「使った」のかも考察する。最後には、普遍とローカル、知識人と大衆の間に位置したカザルス、エリート文化の時代から大衆文化の時代を生きた、文化国際主義者としてのカザルスの変容についてまとめる。